

私記
定年後第二の人生
—勤務と趣味の人生—

My Memoir : Second Life After Retirement
– Life of Work and Hobbies

小林茂昭
Shigeaki Kobayashi, M.D.

March 5, 2025



私記 定年後第二の人生：勤務と趣味の人生

小林茂昭

令和 7 年 3 月 5 日

目次

略歴

はじめに

1. 定年退任後の医療人としての活動

- 1 小諸厚生総合病院院長時代 平成 15-18 年（2003-2006 年）
- 2 相澤病院勤務時代 平成 18 年(2006 年)から現在
- 3 学術・学会的活動
4. 受賞等

2. 趣味の人生

1. スキー
2. テニス
3. 書道
4. 俳句

3. その他のこと

1. 金婚式
2. 旅行（記憶に残る旅行など）

まとめ

寄稿 本郷一博 信州大学名誉教授

付録：2003 年以後の業績（著書・論文等）

写真

略歴

小林茂昭

昭和 13 年(1938)	長野県千曲市戸倉にて出生（昭和 13 年 3 月 5 日）
昭和 31 年(1956)	長野県立上田高等学校卒業
昭和 38 年(1963)	信州大学医学部医学科卒業
昭和 39 年(1964)	横須賀米国海軍病院インターン（卒後臨床研修）修了
昭和 39 年(1964)	信州大学第一外科入局・大学院
昭和 40 年(1965)	米国メイヨー・クリニック留学（6 年間）
昭和 52 年(1977)	医学博士号取得
平成元年(1989)	信州大学教授（脳神経外科）
平成 9 年(1997)	長野冬季オリンピック大会（NAOC）医事責任者、IOC 医事委員
平成 9 年(1997)	国際脳神経外科学会連盟(WFNS) 理事（Administrative Council）（1997～ 財務責任者・財務委員長， 2001～第 2 副会長）
平成 15 年(2003)	信州大学名誉教授
平成 15 年(2003)	JA 長野厚生連・小諸厚生総合病院院長
平成 18 年(2006)	社会医療法人財団慈泉会相澤病院 理事、医学研究研修センター長、脳卒中・脳神経センター長（2016～ 名誉センター長）

主催学会

昭和 63 年(1988)	第 8 回日本脳神経外科コンgres総会会長，名古屋
平成 6 年（1994）	The 1 st Meeting of the International Society for Neurosurgical Instrument Inventors (ISNII) Founding President, Nagoya
平成 12 年(2000)	Matsumoto 2000 Congress (3 rd International Congress of Cerebral Venous System & Meningiomas combined with 12th Japanese Skull Base Society Meeting) President, Matsumoto
平成 14 年(2002)	第 61 回日本脳神経外科学会総会会長、松本
平成 15 年(2003)	第 6 回日本医学英語教育学会会長、東京
平成 28 年(2016)	第 11 回日本医療福祉学会会長、松本 他

名誉会員

平成 15 年(2003)	日本脳神経外科学会名誉会員
平成 17 年(2005)	国際脳神経外科学会連盟(WFNS) 名誉会長
平成 27 年(2015)	米国脳神経外科学会（AANS）終身会員(Lifetime Member)

賞

平成 6 年 (1994)	オーストラレーシア脳神経外科学会賞 (Zamiesen Medal)
平成 12 年(2000)	日経 BP 技術賞
平成 15 年(2003)	日本ロボット学会実用化技術賞
平成 17 年(2005)	メイヨー・クリニック学術業績功労賞
平成 23 年(2011)	米国脳神経外科学会 (AANS) 永年国際功労賞
平成 25 年(2013)	日本脳神経外科学会斎藤真賞国際部門賞
平成 27 年(2015)	信毎賞
平成 29 年 2017)	International Meningioma Society, Golden Medal 賞 (北京)

趣味

平成 28 年(2017)	書道：師範（漢字）、師範格（詩文）、俳句、スキー、テニス
---------------	------------------------------



Mayo Clinic 学術功労賞 (2005)



米国脳神経外科学会賞 (2011 年)



日本脳神経外科斎藤真賞 (2013 年)



信毎賞 (2015 年)

はじめに

昭和 13 年（1938 年）に生を受け、医師となり、信州大学にて 65 歳で定年退官（平成 15 年、2003 年）した。その後、小諸厚生総合病院、そして相澤病院で勤務を続けてきた。本年、令和 7 年（2025 年）に数え年 88 歳となり、米寿を迎える。大学退官時に「教授退官記念誌」（信毎出版）を出版して以来 20 年が過ぎ、時の流れの速さに驚きを禁じ得ない。「光陰矢の如し」とはまさにこのことであろう。

定年当時は体力的にもまだ自信があり、招請を受け、小諸市に新職場を決めた。小諸市では単身生活を送りながら院長業務に従事し、充実した日々を過ごすことができた。3 年後の平成 18 年（2006 年）には松本市に戻り、社会医療法人財団慈泉会相澤病院にて脳卒中・脳神経センター長と医学研究研修センター長を兼任した。また、この間、慈泉会の理事も務めた。80 歳（2018 年）以後も顧問・名誉職として同病院に勤務を続け、リハビリセンターの仕事にも携わるなど、多岐にわたる業務に携わってきた。この間学会活動は徐々に減った。学会活動に関しては国内外のメジャーな会には要請があれば参加したりしたことは自分自身のアップデートにもなった。国内の学会は名誉職が主で、お役御免的な面が多かったが、国際学会には相変わらず要請があったり関与せざるを得ないことが時々あった。中でも国際微小脳神経外科解剖学会（International Rhoton Society）の初代会長をしたことが大きな仕事だった。

信州大学在任中の 60 余年（この間、1965 年から 1971 年の 6 年間は米国留学）は昼夜を問わず多忙な日々を過ごし、定年退官後も 2 つの病院で医療活動を続けてきた。しかし、医療だけに専念して人生を終えるのは何か物足りないと感じ、定年退官後は新たに趣味に取り組むことで生活の幅を広げる決心をした。ただし、趣味だけに没頭するのではなく、医療と趣味の両立を目指した。具体的には、在任中からしていたテニスを定年後も加齢に関わらず続け、新たに俳句と書道に取り組み、それぞれに楽しみを見出し、人間関係の幅を広げることもできたのは幸いである。

本冊子は米寿となった本年、「長寿お祝いの会」を企画していただいた機会に、私自身定年退任後の医療人としての活動と、趣味を通して経験した事について、第二の人生の記録として記したものです。

1. 定年退任後の医療人としての活動

1.1. 小諸厚生総合病院院長時代 平成 15－18 年（2003－2006 年）

信州大学で 50 歳から約 15 年間務めた教授職を平成 15 年（2003 年）年 3 月に 65 歳で定年退官した。2003 年 2 月にはホテルブエナビスタにて教授退官記念祝賀会が行われ、170 名ほどの参加者が祝ってくれ嬉しかったが、これが私の人生の大きな区切りであることを強く感じた。参加者にはメイヨー・クリニック時代から折に触れ相談に載っていただきお世話になった東京大学名誉教授佐野圭司先生、盟友の慶応大学河瀬斌教授、外国からは友人メルボーン大学 Andrew Kaye 教授、教室に留学したインド KEM 大学 Atul Goel 教授、信大学長、医学部教授連、医師会役員、教室員、友人等々が名を連ねた。家族からは、妻の秀子が和服でにこやかに、かつ凜として同行してくれたことが嬉しかった。また、東京女子医大在学中の次女裕子からの花束と一言挨拶も花を添えてくれた。



教授退官祝賀会壇上風景 2003 年

信州大学脳神経外科教室の私の後任教授選考は私の退官後に始まって、私も推薦した 1978 年教室開講一期生の本郷一博君が選考委員会・教授会選挙をへて 6 ヶ月後に着任した。私は退官後第二の職場として実は市内相澤病院を望んでいた。というのも信大在任中、大学病院では脳神経外科病床が 14 床しか与えられていなかったの、松本地域の脳外科診療の基幹病院として相澤病院の脳外診療を手術室設備も大学と同レベルにさせていただく等、診療・研修にも教室として協力し、サポートしてきていたので同病院を第二の人生の職場として選ぶのは自然であったし、自らも希望していた。ただ医学部教授層からは長野厚生連小諸厚生総合病院院長を強くすすめられた。また JA 長野厚生連の意をもって見えた当時の篠ノ井総合病院長の松尾宏一先生（信大脳神経外科同門）が「先生、3 年間院長を死ぬ気でやってみませんか」との要請にも答えるべく小諸市に新職場を決めた。平成 15－18 年（2003－2006 年）の短期間ではあったがこの 3 年間は全力投球したし、幸い上田高校の同期生が散在する小諸～上田地方なの

で彼らは喜んで応援してくれたし私自身も楽しむことが出来た。

さて小諸への赴任は一人で行くか、夫婦で行くかの選択であったが、基本的に3年間の赴任予定であったのでの私一人で赴任することにした。週末は一緒に過ごすこととして私が松本に来るか秀子が小諸に来るかにした。

小諸厚生総合病院名誉院長の坂本和夫先生とは、嘗て同院に脳神経外科を開設する際（私の信大助教授時代）から好意的にお付き合いを頂いており病院職員が脳神経外科診療はじめ診療全般に協力的で気持ち良く仕事できた。嘗て当院が佐久総合病院の分院であった当時の創始者の若月俊一先生イズムの伝統より、院長が定期的に労働組合に病院の運用状況を説明するしきたりがあり、次第に私も慣れて職員との意思疎通がよくなったと思う。浅間山は眺めるたびに心が穏やかになる素晴らしい景観を提供してくれた。



黒斑山登山 浅間山バックに

院長職は病院を統括するのでそれなりに忙しかったが私なりに一生懸命務めた。小諸市や近隣の行政長諸氏との付き合いの会「長の会」があり、また県内の全厚生連病院院長会議などもあり長野の本部に院長専用車で出かけたりした。大学在任中も松本市で実行したことであったが私は病院と市民との接点が大切と考えていたので、小諸市でも市民公開講演会などを企画した。現役時代に学会主催で講演をお願いした事のあるNHKの元アナウンサー山川静夫氏の病気体験話や、Mayo Clinicに同時代 留学してから親交のある国立循環器病センター総長の山口武典先生に講演をお願いしたりした。私はまた、東信地域の病院間の意思疎通と連携が大切と考えたので、佐久総合病院夏川周介院長ほか数病院の院長先生方に声を掛けざっくばらんに地域医療に関する

意見交換をする懇親会を定期的にするのを企画した。忌憚ない会にするため、会費は院長の自腹で払うこととした。



病院玄関に揮毫 2017

翻ってみると、この間妻の秀子は総じて仕事のことに異論は言わず私がしたいことを素直に受け入れ協力してくれ大変ありがたかった。週末に浅間山山麓を散歩しながら見る浅間山の雄姿は見慣れた北アルプスとは違った

風情で心に刻まれ忘れられない。週末に小諸に車を運転して来てくれる時には、何か手製の料理などを持ってきてくれた。

老朽化した病院の新築移転に関しては当時の小諸市長芹沢勤氏とよく話す機会があり、氏は病院は市の中心に据えるべきとの強い信念を持っていた。新築移転なった2017年、黒柳隆之院長の依頼で私が玄関に病院のモットー「医療は住民のもの」を揮毫した。

私の人生の中で経験した教授職も院長職もどちらも大変であり、そのため両方とも一生懸命務めたつもりであるが、どちらがより大変だったかといえば私自身は教授職の方が数倍の重みとストレスを感じた。教授職では、学生・若手医師の教育、研究・論文作成に加えて、医学部学内や附属病院内、学内の諸事、日本国内の学会関係、日本の脳外科学会の代表としての国際的な脳外科関係の諸問題など、一つ一つが大変であり、それらを総合した重責があったと感ずる。勿論、これら責務を全うできたのは私一人の力ではなく、当時の教室医局員のたゆまぬ協力と努力があつてのことであり、改めて感謝したい。また家族、友人・関係者の方々にもお礼を言いたいと思います。

日本脳神経外科学会は、2002年（平成14年）私が学会長のときに法人化することが決定され初代理事長が東北大学の吉本高志教授となったが、吉本教授が私に法人理事になりますかと問われたとき、丁度大学定年退任の年だったのでお断わりした。しかし、世界脳神経外科学会連盟（WFNS）の方は、WFNS運営委員会（Administrative Council）のメンバーとしての任期があと5年あったので、小諸に来て2005年まで連盟理事を続けることとして活動した。連盟の財務担当責任者、次いで副会長の任期終了後、連盟の名誉会長に選出された。

世界脳神経外科学会連盟(WFNS) 招宴にて (2017.8, Istanbul)



WFNS 名誉会長のテーブル



M.G. Yasargil 教授



WFNS 会長 Y-K. Tu 教授



E.de Oliveira 教授

I.2. 相澤病院勤務時代 平成 18 年(2006 年)～現在

小諸厚生総合病院院長職の 3 年が終わり近づいてきたころ、病院に相澤病院院長・理事長の相澤孝夫先生と事務方トップの本部長塚本建三氏が訪れ相澤病院への就職を正式に招請された。脳神経外科診療と研修医教育の統括の仕事をして欲しいとのことであった。私の従来からの希望でもあったのでお引き受けした。私が自由に企画し仕事をしていただきたいということであった。また病院の上部機構である慈泉会の理事も務めることとなった。

相澤病院はこの頃急成長を遂げており、救急医療を含む地域医療への貢献に関しては信大病院が気にするほどの規模にまで成長していた。平成 6 年から 10 年間で常勤医師数が 34 人から 136 人に増員していた、とのこと(塚本氏)。本来大学病院は高度先端医療の実施と開発が主使命であるが、独立法人化された大学にとっては、一般的な疾病の患者も診療し、業績向上を図る努力が国から求められていた。相澤院長は「救急医療は医の原点」であるとの信念のもと救急医療の充実を図っていた。当時の田中康夫長野県知事も注目していた。

信大の退任教授の就職先として相澤病院に赴任するのは私が初めてで、それから 19 年経った現在まで 5 名もの名誉教授が相澤病院に就職している。当初信じられないことであったが、地域医療に対応する症例数と診療内容から研修医、医学部学生の臨床教育の場としても信大と相澤両病院の協力関係は非常に重要となっている。当初より相澤理事長・院長は好意的で私のしたいことを殆ど受け入れて実行させてくれたし、塚本本部長も協力的であった。相澤先生とは月に一回二人で昼食をとりながら私の業務のこと、研修医教育、病院全体の課題、国の医療等について自在に話し合うこととして私が 80 歳まで続けた。私が留学した米国ミネソタ州の Mayo Clinic は地方にありながら、患者診療を基盤に発展し、現在は医科大学、大学院を持つ米国ベストホスピタルで常に 5 位以内に入っている病院として参考にすべきと考え相澤孝夫先生を含む訪

問団で見学に行った（2007 年）。



相澤院長と Mayo Clinic 訪問



相澤病院 医学研究研修センター関係医師職員

私の相澤病院への赴任は丁度卒後臨床研修制度が制度化され時期（平成 16 年：2004 年）にあたっていたので、当院での卒後臨床研修制度つくりと運用に精力的に活動した。県内では佐久総合病院が最も人気がある研修病院として全国から研修医が集まったがそれに次ぐようつとめた。私はまず自身で臨床研修指導医の資格を取り、県内で初めて相澤病院が臨床研修指導認定施設認定を取得した。幸い相澤病院は救急患者が多かったので研修医には人気があったが、加えて当院の特徴を出すべく医学英語研修も追加した。地方病院ではあるが世界的視野を持つ医師を育てたいと思ったからである。臨床研修修了した医師は現在まで 500 名おり、彼らは全国に分布して専門医として活動している。医師研修センター長としての私の企画に相澤先生には殆どすべて賛成していただき実行させていただくことが出来た。おそらく同じ思いを共有されていたのではないかと思います大変感謝している次第。

信大在任中から脳神経外科の専門研修をしたいという外国人脳外科医からの要請手紙を引き続き受け取っていたので、相澤先生に相談して相澤病院に外国人医師の留学プログラムを立ち上げ若い外国人医師の研修を受け入れた。センター長在任中計 19 人となった。留学生医師受け入れに関しては、皆の協力を得て、脳卒中・脳神経センターの毎朝のカンファランスは英語で行うこととした。帰国した留学生の中から教授クラスが何人か生まれていて嬉しい（北京大学第一病院脳神経外科部長伊志強（Yi Zhiqiang）准教授、インドネシアのエアランガ（Airlanga）大学脳神経外科 Asra Al Fauzi 教授で 2027 年の世界脳神経外科学会会長、等）。

相澤病院は地域医療を担う中核病院としての規模は大きいに加えて先端医療にも相澤理事長は積極的である。医療機器もガンマナイフ、PET スキャン、トモグラム、陽子線治療装置を使用している先端医療病院とされている。病院としてもいくつかの全国学会を主催してきているが、私自身は第 11 回日本医療福祉学会を学会長として 2013

年 8 月 ホテルブエナビスタで開催した。慈泉会の支援があつてできたことである。

この間相澤病院に勤務した我が家の家族もいる。次女の裕子が東京女子医大卒業後、佐久総合病院と信大病院産婦人科で初期研修・専攻医研修を行い専門医資格習得の後、相澤病院に暫く勤務した。また夫の松本隆吾君が相澤健康センターで鍼灸師として診療した。裕子は次いで市内波田の松本市立病院産婦人科にお世話になり、その後子供の教育もあり一家で上海に移住し、現在 Parkway Shanghai Hospital に産婦人科医師として勤務している。

相澤病院に就職して 12 年間（2006-2018 年）は医学研究研修センター長、脳卒中・脳神経センター長時代（2016 年より名誉センター長）として活動し、80 歳を超えた 2018 年には慈泉会の塩尻診療所長、2024 年からは相澤リハビリセンターに週一日勤務と合わせて脳卒中・脳神経センター名誉センター長として毎朝のカンファランス参加と予約患者の外来診察をしている。

長年続けてきている当院脳卒中・脳神経センターの毎朝のカンファランスであるが、特徴的なのは、脳外科医、脳神経内科医、リハビリ医が合同で行い画像を中心に患者について対応を検討するもので、治療方針を立てるのに多角的に検討出来て有用である。また、教育的な意義も大きい。時に病理医、放科医も参加する。信大からのポリクリの学生にも印象深いようである。私がレジデント時代 Mayo Clinic では週一回行われていたカンファランス形式で信大在任中にも神経内科と数回行ったが、講座単位の独自性もあつて続かなかった。

さて、塩尻診療所への通勤は老齢でもあり病院支給のタクシーチケット使用の通勤なので安全かつ身体的に楽になった。塩尻リハビリセンターの仕事は訪問リハビリと通所リハビリ利用者合わせて 150 名近くを個別に 3 ケ月に一度診察すること、リハビリ中に急病などあったとき対応することであった。現役時代、脳卒中・脳腫瘍等の手術を含む急性期患者の治療が主であった私にとって、慢性期の患者さんを見てリハビリを含む対応をすることは興味があつたしまたそれまでの経験が役立ったと感じた。上海の復旦大学華山病院神経内科・リハ科の丁准教授が見学に見えたとき相澤のリハビリの体制に感心されたと同時に、リハ器械のさらなる導入について示唆があつた。

塩尻診療所勤務になって秀子の増えた負担としては、塩尻通勤日には昼弁当を用意することであった。私にとっては人生で初めて弁当をもつての出勤で、その内容が毎日楽しみなことでもあつて感謝している。

一方、岡田での家庭生活としては、脳外科手術や救急患者対応等が無くなったので日

常は時間通りの規則正しい生活ができるようになり夫婦で過ごす時間、趣味に費やす時間も増えた。

令和6年（2024年）4月からは相澤病院の松本地区のリハビリテーション科に異動して訪問リハビリ担当医師の一人として週一日の勤務となっている。脳卒中・脳神経センターの方は名誉センター長として毎朝のカンファランスに引き続き参加している。



脳卒中・脳神経センター朝カンファ、復旦大学崑山病院リハ科丁准教授と

1.3. 学術・学会的活動

学会参加に関しては大きい学会は行くが、小さい会の多くは省略して、学会発表の機会は講演依頼がある場合のみ参加と回数が減っている。国内の学会で発表するような機会は殆どないが、メジャーの国内学会では最新の情報を得られ診療に反映させられるのが利点であり、また会長招宴等で長年お付き合いのある旧友教授諸氏に会えるのも楽しみである。

国際学会からは時々依頼講演があった。概して国際学会は、年齢によって急に参加要請が無くなるというよりは、学会発表・論文発表などの活動がある限り注目されて講演の要請が来るようであり、その意味では国内学会に比して長いタイムラグをもって学会参加が少なくなっていくと感じている。高齢だからという Age discrimination 的な考え方はあまり強くないといえる。事実、例外的であろうが、私より年長の脳外科医で活躍している著名な方が何人かいる。例えばレジェント的脳外科医 Dr. G.Yasargil (トルコ), Dr. M. Samii (ドイツ), Dr.A.L. Rhoton (アメリカ) 先生などである。

2003年（平成15年）に65歳で教授退任してから私が参加して発表した国際学会の幾つかを挙げると：

- ・ 2nd International Neurosurgical Winter Meeting, Zermatt, 2007.2
- ・ WANS & 4th International Symposium on Microneurosurgical Anatomy, Iguassu,

Brazil, 2008.9

- 10th Annual Conference of Skull Base Society of India, Mumbai, India, 2008.10
- Swiss-Japanese Neurosurgical Joint Meeting, Zurich, Swiss, 2009.1
- 15th Scientific Meeting of Hong Kong Neurosurgical Society, Hong Kong, 2008.11
- 14th World Congress of Neurosurgery, Boston, USA, 2009.8
- 3rd WFNO (国際脳腫瘍学会)、Yokohama, Japan, 2009.5
- 3rd WANS (World Academy of Neurological Surgery), MGH(Ether Dome), Boston, USA, 2009.8
- AANS (米国脳神経外科学会)、Denver, USA (Cf: 国際功労賞受賞) , 2011.4:
- The 11th Asia Australasia Skull Base Surgery, Beijing, China, 2012.10 (桂林旅行 p.27)
- The 15th World Congress of Neurosurgery, Seoul, Korea, 2013.9
- China-Trinidad Tobago Neuroscience Health Conference, T-Tobago, 2015.7
- The 12th Asia Oceanian International Skull Base Surgery Conference, Mumbai, India 2015.1
- Interim WANS (World Academy of Neurological Surgery), Jeju Island, South Korea, 2015.4
- World Congress of Neurosurgery (WFNS Interim Meeting), Rome, Italy, 2015.9
- The 6th WANS (World Academy of Neurological Surgery), Athens Greece, 2016.9
- The 16th World Congress of Neurosurgery, Istanbul, Turkey, 2017.9
- The 2018 Taipei International Neurosurgical Symposium, Taipei, 2018.4
- The 1st International Rhoton Society (iRS) Meeting, Tianjin, China, 2018.6
- The 7th WANS (World Academy of Neurological Surgery), Prague, Czech, 2018.8
- Interim World Congress of Neurosurgery 2019, Beijing, 2019.9
- Interim WANS (World Academy of Neurological Surgery), Mumbai, India, 2019.12
- The 2nd International Rhoton Society (iRS) Virtual Meeting, Stanford, USA, 2020.8
- The 3rd International Rhoton Society (iRS) Meeting, Istanbul, Turkey, 2023.8
- The 4th International Rhoton Society (iRS) Meeting, Taipei, Taiwan, 2024.11
- Asia-Australasian Congress of Neurosurgery, Kaohsiung, Taiwan, 2024.11

最近では、特に 2016 年に恩師のフロリダ大学のロートン教授 (Albert L. Rhoton, Jr.) 逝去のあと発足した国際ロートン協会 (International Rhoton Society, iRS) の初代会長に選ばれて、先ずは協会の会則作成、そして運営・発表で忙しくなった。会長任期の間の iRS 学術会議はスタンフォード大学で Virtual meeting として開催さ

れ、私は微小外科解剖の歴史的展望について会長講演をした。私の後の iRS 会長は佐賀大学名誉教授の松島俊夫先生がなったので多少楽になり、時折の Zoom 主体の理事会と、加えて 2023 年夏にはイスタンブールでの第 3 回 iRS 学術会議の現地開催で発表した。私も松島先生も夫婦で参加した。

外科解剖に関する研究は、解剖そのものは従来からの解剖学を外科手術、顕微鏡下手術の見地から研究するので比較的安定したテーマとなりうる。特に歴史的展望をテーマに現代の各種脳神経外科到達法に関連付けて発表するようにしている。その意味では近年ご教授を頂いている医学史の権威順天堂大学の坂井建雄教授（日本医学史学会理事長）との交流に大変感謝している次第である。坂井建雄先生との共同研究と作業によって幾つかの関連学会で外科解剖の歴史的展望を踏まえ、脳外科手術との関連においてまずまずの発表ができてきており先生との交流に大変感謝している次第。論文も書くこともできた (S.Kobayashi et, al : Neurosurg Rev, 45,253,2022)。

昨年（2024）11 月の台湾の学会は旧友の著名脳外科医達何人かに会えて嬉しかった。彼らは Oldtimers ではあるが学会の主役としてよばれることは素晴らしいことだと感銘を受けた次第である。引退して自由自在に生きることと勤務との選択に迷っているわが身にとっては羨ましい存在である。



松島、Al-Mefty 教授と(iRS 2024)



Prof.s.Morita,Spetzler,Samii,Tu と (AACNS,2024)

1.4. 受賞等

人生後半になり、それほど多くはないが幾つか賞を頂いて、自分のしたことが評価されたという意味で光栄であった。勿論、各々の業績に関しては自分一人で成就されたものではなく同僚との共同作業が評価されたものでその仲間の代表として授与されたものと考えたい。教授定年後に頂いた賞としては、小諸厚生総合病院院長の間の 2005 年に Mayo Clinic 同窓会から学術業績功労賞（Professional Achievements Award）を授与され家内とフロリダのジャクソンビルでの授与式に参列した。この賞

に関しては、偶々レジデント同期であった Mayo Clinic の David Piepgras 教授を推薦したいと彼に申したところ、彼は私を既に推薦したといわれて、推薦人が分かった次第である。同時期にメイヨー・クリニック同窓会誌に私の特集記事が載ったのも嬉しかった。私のレジデント 1 年次 1965 年、60 年前の顔写真が残っていた。

Mayo Alumni

2014 ,No.4 より

特集記事 1 頁目

とスナップ (3

頁目より)

WHERE ARE
THEY NOW?

Shigeaki Kobayashi, M.D., Ph.D.

Director, Medical Research and Education Center
Senior Consultant, Stroke and Brain Center
Aizawa Hospital, Matsumoto City, Japan



Shigeaki Kobayashi, M.D., Ph.D. (NS '71), is recognized around the world as a master of neurosurgery, with special expertise in vascular microneurosurgery. His accomplishments are legendary:

- Developed the concept of carotid-cave aneurysms.
- Maintained and enhanced international recognition for Shinshu University Hospital in Nagano, Japan, where he served as the chair of neurological surgery from 1988 to 2003.
- Played a key role in educating the next generation of Japanese neurosurgeons, including helping to train more than 100 neurosurgery residents who now practice in Nagano Prefecture and other areas.
- Has been a visiting professor to more than 30 universities around the world.
- Authored more than 800 scientific papers.
- Worked with Hitachi to develop robotic neurosurgery.
- Helped to develop the intraoperative CT scanner with Toshiba, which was installed in Shinshu University's

neurosurgical operating room in the early 1980s — a first in Japan and one of the first in the world.

- Served as chief medical officer of the 1998 Winter Olympic Games in Nagano, Japan, overseeing the medical service and 9,000 staff members including physicians, nurses, emergency personnel and the doping control system.
- Was a founding committee member of the Japanese Congress of Neurological Surgeons and was the group's eighth president.

From Japan to Rochester

Dr. Kobayashi arrived at Mayo Clinic in Rochester in 1964 after completing an internship at the U.S. Naval Hospital in Yokosuka, Japan.

"I was accepted as a resident of neurosurgery on the condition that they observe me working as a fellow in general surgery for one year," says Dr. Kobayashi.



A proponent of lifelong learning, Dr. Kobayashi has studied calligraphy in recent years and takes classes to improve his skill.

次いで、相澤病院在籍中の受賞としては、2011年に米国脳神経外科学会（AANS）から永年国際功労賞（International Lifetime Achievement Award）をデンバーでの年次学術総会の主会場で会長の James.Rutka 教授から授与された。



AANS 学会 主会場で授賞式

信大同門では、日本からは本郷一博教授夫妻、奥寺敬教授、エジプトから A.Ammar, Y. Orz 両教授が参席してくれた。

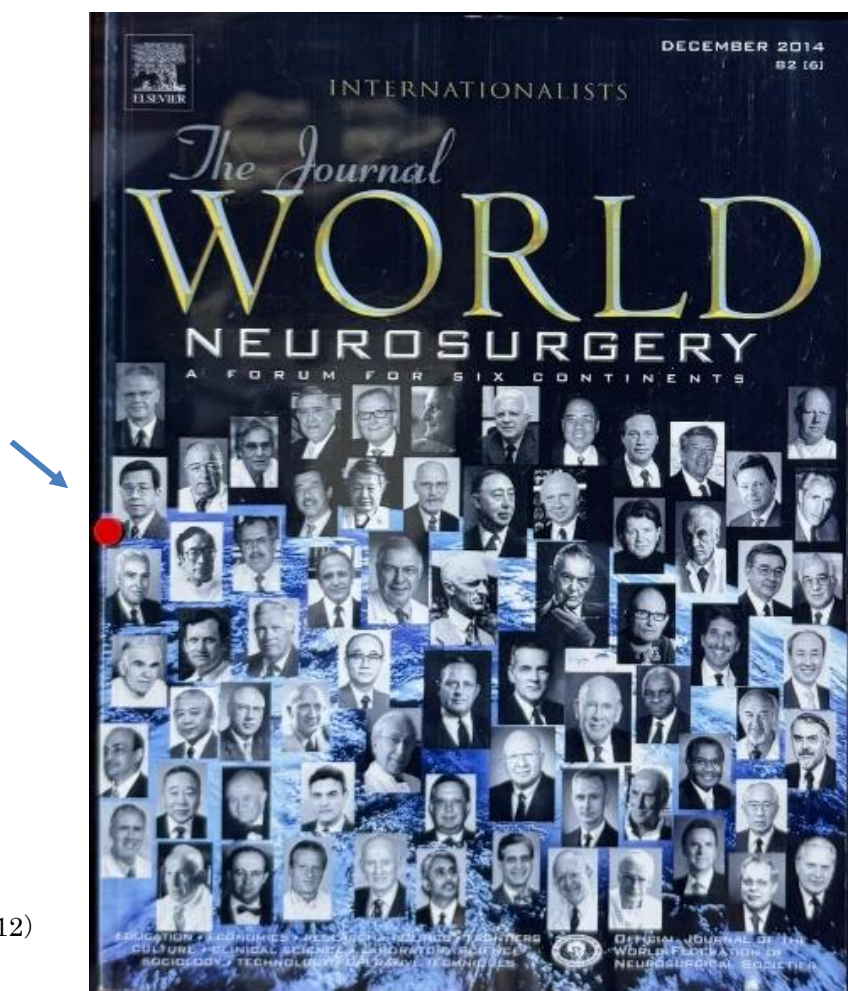
2017年には国際髄膜腫学会から International Meningioma Society Golden Medal Award を授与（北京）。国内では2013年に日本脳神経外科学会斎藤真賞国際部門賞を授与された。初代学会長名を冠した学会賞を第61代会長を務めた私が受賞し光栄であった。

2015年に頂いた信毎賞は小澤征爾氏が第4回に受賞した賞であるが、私への授賞は当時の長野市民病院院長竹前紀樹先生、本郷一博信大病院長はじめ友人たちに推薦され長野オリンピックの貢献なども評価されたのではと感じて嬉しかった。



信大脳外科同門諸兄と、AANS 学会場ロビー

授賞とは直接関係ないが、顕彰された一環とも考えられる事柄がある。米国の南カリフォルニア大学（USC）教授 Dr. Michael Apuzzo が編集長だった WFNS（世界脳神



J. World Neurosurgery 誌表紙
Internationalists 60 名（2014.12）

経外科学会連盟）の機関誌 J. World Neurosurgery (2024 年 IF : 2)が 2014 年 12 月号の表紙に近代脳外科史上有名な Dr.Cushing, Dr.Dandy から始まって 60 名の史上脳外医が”Internationalists”として顔写真が掲載された。その中に杉田虔一郎先生と私の写真がある。理由は明確でないが光栄なことと感じた。

2. 趣味の人生

趣味について

私は学生時代からスポーツが主な趣味で、スキーとテニスである。学生時代にこの二つの部に属したこともあり、教授在任中は信大医学部部活それぞれの顧問を務めた。現在でも、毎年同部の部誌への寄稿と多少の寄付もしてきている。両趣味とも年齢に応じ続けており、スキーは年一週間程度であるが、テニスは 80 歳を過ぎてから熟年の仲間と週に 1, 2 回、それぞれ 2 時間ほど行っている

加えて、体が動かなくなってくる老後のことを考えてスポーツ以外の趣味を始めようと信大の定年退任を機に非スポーツ系の趣味を考え始めた。私が書をやることにしたのは小諸厚生総合病院から相沢病院に転職して 1, 2 年したころ上田高校の同窓生の T さんに書を勧められた 70 歳からであった。

もう一つの非スポーツ系趣味として、信大定年の 1 年程前に始めた俳句がある。信大構内で月に一度数人の教授たちが集まって夜間開いていた句会である。句の先生は当時保健学科の教授であった宮坂静生先生で、日本現代俳句協会会長となられた方である（現在同協会特別顧問）。宮地良彦学長や医学部の基礎学科の教授たち数人が校内で開いていた月例句会に入れていただいた。

2.1. スキー

思えば昭和 38 年（1963 年）に大学卒業して横須賀の米国海軍病院で過ごしたインターン（卒後臨床研修）の一年間は一度米軍基地の小学校生徒のスキー旅行に付き添い医師とし裏磐梯スキー場に行ったのみであった。インターンの後信大第一外科に入局して 1 年半後に米国ミネソタ州 Mayo Clinic に 6 年間留学することになったレジデント修練期間は忙しくロチェスター市の近くの小規模なスキー場に休日 2, 3 回スキーに行ったのみであった。雪は積もっても近くには高い山がない。面白い制度で、リフト券は無くスキー場に入るのに入場券を払えばよかった。

昭和 46 年（1971 年）に帰国して第一外科で脳神経外科グループとして活動してからは仲間にスキー愛好家が多かったこともあり、週末などに頻回スキーに行った。主に白馬地方のスキー場で滑ったが、乗鞍高原も雪質がよく好きなスキー場であった。幸いなことに白馬村役場から第一外科へ依頼があり、希望する医局の仲間が冬期間村の診療所で週末診療を行うことになった。そこで、仲間と二人で交代で勤務し、そのおかげでフリーのリフト券を使って交代でスキーを楽しむことができた。

昭和 53 年（1978 年）信州大学に脳神経外科教室が開設され初代杉田虔一郎教授が赴

任された。第一外科から 9 人が新教室に移行して本格的に脳神経外科診療を行うようになったが教授はじめほとんどがスキー愛好家であった。まもなく、中部地方 3 大学の脳神経外科教授、杉田虔一郎（信大）、角家暁（金沢医大）、高久晃（富山大）発案の白馬脳神経外科セミナーがはじまり、八方尾根スキー場と他のスキー場と交互で毎年開催されるようになった。このセミナーは私の助教授・教授期間を通じても絶えることなく全国規模で現在も続いてきており、今年は第 39 回セミナーが大山スキー場で開催された。

杉田教授はまた、フランス脳神経外科学会との共催で、ヨーロッパアルプスのスキー場で脳神経外科セミナーの企画を 1988 年より始め、私の代になってからも続けて都合 8 回シャモニーをはじめとするフランスアルプスで開催した。またスキーリゾートにおける脳神経外科セミナーは他の欧米アジアの脳外科医の仲間との学会にも広がりを見せた。

私がスキーをすることまた国際的活動があることもあってか 1998 年の第 18 回冬季オリンピック大会長野大会の医事責任者に任命され、IOC 医事委委員としての役割をしたことも趣味が高じてのことであったのだろうか。大会後皇居に招かれ天皇皇后両陛下から労われるというユニークな経験をした。



2nd International Neurosurgical Winter Meeting, Zermatt, Swiss, 2007.1.

信州大学教授在任中は医学部スキー部の顧問を務めて部員たちの相談に乗ったりした。嬉しいことに何人かは卒業後脳神経外科を専攻して入局してくれた。後藤哲哉、

四方聖二先生などである。

松本地域には近くにスキー場が多くあるので学生時代はシーズンに 30 日ほどは行っていたが、この間何よりも大けがをしなかったのが幸いであったと思う。

近年では高齢者には危険と言われるボードの普及にはついていけず、また装備が大変なこともあって頻回には行っていない。同行してくれる友人たちが少なくなったのも原因である。近年は孫たちとのお付き合いスキーが主であり主に爺ヶ岳スキー場に親しんでいる。

毎年の白馬脳神経外科セミナーにはできるだけ参加するようにして、お楽しみのナスターレースにも参加しているが、嘗ては常に上位に入っていた順位も昨年（2024 年）の第 38 回白馬セミナー in ルスツでは 30 位ほどであった。



白馬セミナー、ルスツ 2024.2

（中小林、左隣竹前先生）



孫智晴と、爺ヶ岳スキー場 2014

2.2. テニス

老後のスポーツ趣味としてはスキーよりテニスの方が、短時間で気軽にできることもあり 80 歳を超えた現在も比較的頻回にプレーをしている。時間的には、現役脳外科医当時と違い余裕があるものの、一回に 2 時間プレーするとして、週二回以上は無理である。回復に 2 日はかかるからである。それも夜間睡眠時間を十二分にする必要がある。



テニス部顧問 OB 千葉教授と

2003 年 65 歳で大学定年退任して小諸厚生病院に 3 年、次いで 2006 年からは相澤病院に勤めているが、それぞれの病院・地域でそれなりのテニス仲間がいて楽しんできた。何よりも人間的交流が楽しいと同時に、プレー後の食事、ビールが美味しく健康的気分になれるのが幸いである。だからと言って他人より長生きするであろうとは断言できない。まさに自身が今、身をもつての実験が進行中だからである。

小諸在住の 3 年間は、院内外の仲間と週末の日中は、小諸市あるいは追分のテニスコートで軽井沢からの仲間も加わってテニスを楽しんだ。この間信大在任中によくプレーした小川秋実、千葉茂俊先生等をお呼びしてテニス交流会と懇親会を企画したこともあって楽しかった。

2006 年に松本に帰ってからの 70 歳、80 歳代は矢張りテニスは週 1、2 回は続けてきた。惰性とは簡単に言えないと思う。矢張り定期的に体を動かせば体調がよく、それが手っ取り早い慣れたテニスなのであろう。ジョギングでも速足徒歩でも体内エンドルフィンが出て気分を高揚するというのが、テニスには加えてゲーム性があるので余計楽しいのではないかと自分では理由付けしている。

人間的交流であるが、いくつかのグループに加わってそれぞれもグループ仲間と職業を超えての交流がある。テニスのレベルはそれぞれ違うがそれなりに楽しい不思議なスポーツである。ミックスダブルも非常に楽しいものである。松本地方のグループとしては幾つあったが、例えば故宮地良彦先生（元学長）が始めたという信大多学部の名誉教授たちグループ、豊科地方の多職種高齢者からなるベテランテニスのグループ、松本ラーラでプレーする男女混成グループ、などが付き合い仲間である。押しなべて定年後の老人が多いせいもあり、時に逝去の報がある時は悲しく寂しい。

付き合いが断ち切れないのが、春秋二回の医学部テニス部 OB テニス大会である。現役のテニス部員たちが一生懸命企画して OB を歓待しプレーをさせてくれる。「こまくさ会」がその名称であるが、嘗て私も現役中こまくさ会の会長をしたこともあり関係は断ち難い。先ず現役部員は年一回の部誌を編集発行する。その部誌に OB たちは投稿するのであるが、部誌が配布される時には OB 達は何らかの寄付をして現役の活動資金の一部にする仕組みになっている。涙ぐましい努力である。私の投稿内容は加齢とテニスに関することが多いが、そろそろネタが無くなりそうではあるが、一年たつと不思議と新しい見解・アイデアが出てくる。尤も若者達が反論がにくい内容になりがちなので気が楽である。勿論現役部員らが興味をもって読むかはわからないが、おそらく興味津々というわけにはいかないのは当然だ。昨年秋のこまくさ大会では

ついに私は最年長参加者であった。今年はついに数え年で米寿となる。なんとか参加したいものだ。なにせ一昨年のこまくさ大会では、学生パートナーのお陰もあり優勝したのだから。

2.3. 書

父誠志は歴史、古文書に凝っていて小林家の歴史を探究していた。また素人ながら木彫りの仏像を彫ったり書も結構趣のある字を書き漢文・漢詩も作った。母と志は多趣味で詩吟・書・旅行などを友人達と楽しんだ。特に書は熱心で漢字と仮名ともに日本書道の師範で賞も幾つかとっていた。また書と共に絵も結構上手であった。



小林家の先祖には寺子屋を持ち能書家の小林宣智がいて佐久間象山との交流もあったという。祖父の小平治も戸倉村で能書家といわれていたらしい。という私は 70 で

相澤病院院内の書道グループに入り日展会員の石飛博光書道会系統の静鐘会に入って細野静耀先生の指導を受けてきている。漢字は師範、「漢字かな交じり」（現代詩文）は師範格になった。「穹人」は石飛先生から頂いた私の雅号である。

2.4. 俳句

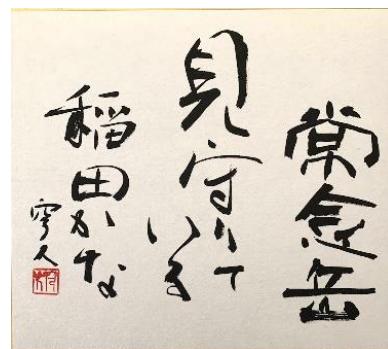
そもそも私が俳句に興味を持ったのは、高校時代たまたま土地の句会に同級生にさそわれた時私の句一つが褒められた記憶が残っていたことによる。2006年に小諸から松本に戻ってきてからは、宮坂静生先生の句会は市内の公民館で月例会として続いており、こまくさ句会と称していろいろな職種の市民が参加して、宮坂先生の主宰する月刊句誌「岳」に掲載されている。私の俳句はなかなか進歩していないと感じている。というのも私はなかなか現代俳句になじめず、努力はしているがどうしても自分流の花鳥諷詠調的になってしまいがちである。むしろそれに徹したいと思うからか、高評価はあまり得ていない。岳同人には現在、朝日俳壇の選者の一人になっている小林貴子さんがいて私の直上の師匠となっていていてくれる。

いくつかの自作の俳句を記す。

上海の映える夜空や冷奴
減らしゆく宛名の数や年の暮
枯野行くモーゼの杖やガザ救わん
新涼や木の間に流る雲淡し
枝豆の弾みて指のへベルデン
地下壕に残る雷管年移る
敦煌の十字路広し石榴売り
八方尾根(はっぼう)に我が影ケルン並びけり
松枯れはコロナに罹る夏の山
常念岳に雲纏はりて春一番
常念岳見守りている稻田かな



句会メンバー（前列左より 2 宮地良彦先生, 4 宮坂静生先生, 5 小林、後列左より 1 小林貴子氏）



茂昭句・書

さらに最近では俳句の英訳に興味があり、俳句英訳フォーラムを提案して「岳英語

句会」(Take English Haiku Forum, TEHF) を始めたところ、言い出しの私が会長にされてしまった。英語俳句は特に、アメリカで盛んであるが句誌「岳」にも英訳俳句のページがあり、その担当の矢島恵さんに英訳句の指導を受けて月一回開催していて既に 20 回ほどになった。自作句の英訳を数編記す。

菜の花や雲湧き思うウクライナ

Canola flower fields

Clouds spring up,

Reminding of Ukraine

人生に卒業はなし月は満つ

There's no graduation

In one's life

There's full moon in the sky

わくらばやいまだ戦の絶えぬ夜よ

Sickly leaves,

Endless wars sprout worldwide,

No end in sight

海の日や留萌の海に陽の沈み

Marine Day,

The breathtaking sunset

Over Rumoi's sea

3. その他のこと

3.1. 金婚式

3.1.1. 結婚 50 周年記念 (金婚式)

秀子と結婚 (昭和 42 年 : 1967 年 6 月 22 日結婚) してから 50 周年になり、平成 29 年 (2017 年) に私は 79 歳、秀子は 75 歳となった。自宅で二人だけの記念の食事をした。

金婚式の夏には子供・孫たちが集まって我が家でバーベキューをして祝ってくれた。私共は見合いした一ヶ月後に急いで結婚して渡米してから 50 年。いろいろ苦労はあったが、



第 50 回 結 婚 記 念 日 2017 年 6 月 26 日 岡田宅にて

子供 4 人、孫 7 人の家族に恵まれたことを感謝し、夫婦ともに幸せを実感した。

秀子は金婚式に記念として、今までのように学会とは関係ない旅行を企画したいと提案した。彼女が希望したのは敦煌旅行と北欧旅行であった。敦煌へは上海に住む次女裕子家族と同行することにし、北欧へは夫婦二人だけで阪急旅行社プランに加わっての旅行であった。私はまだ病院勤務もあったので初めあまり気が進まなかったが、今後の気力・体力の衰え、資金減少を勘案してこのプランを実行することにした。この思い切った 2 大旅行を無事に終わってみると充実感とともに、この旅行がこれまでの我が人生の大部分とは違って、妻秀子の主導によつての企画に従ったということで、ある意味イーブンに近くなったかなという感じもあつて嬉しかった。(旅行後述)



結婚 50 周年の家族、BBQ パーティー2017

3.2. 旅行

二人で同行した思い出に残るいくつかの旅行

私の外国出張時は若いころは単独が多かったが、後半は同行することが多くなった。資金的には負担増であるが、メリットも多い。学会仲間との付き合いにも資するようになり、自分的には発表にもより集中できるようになる。大抵の場合、学会期間中に **Social program** があり妻は小旅行も楽しんだ。また多くの学会は観光都市やリゾート地で行われるのも楽しみである。

秀子が結婚してから訪れた外国の数を書き留めていた。総数 42 か国に及び、うち複数

回訪れた国は 15 か国であることが分かった。渡航の機会としては私の学会出張に同行したことが最多であるが、他にも夫とは別にゾンタ世界大会参加、家族旅行、次女家族の住む上海訪問旅行、パリ在住していた長女家族の孫のベビーシッター、アメリカの梅子姉と夫アーマーの看護・葬儀、ラボ活動のホームステイ付き添い（シャペロン）、また好奇心からの旅行などである。我々二人とも訪問国は5大陸に広がるが、ロシア旅行がないのが不思議である。

旅行はすべて得るところがあったが、下記に夫婦で一緒に旅行して印象に残る場所を幾つか挙げる。

● **ブラジル イグアス滝** (2008.9)

各国から限られた脳外科医が選出された会員の学会「世界脳神経外科医アカデミー (WANS) がイグアス滝の脇のホテルで行われた。世界 1, 2 の巨大な滝、熱帯動植物園を訪れ忘れえぬ感銘をうけた。

● **香港マカオ** (2008.11.19-23)

香港の脳神経学会に招待され、自由を謳歌して発展している香港の人々と街の明るい雰囲気と美味しい海産物の料理を楽しんだ。中国に返還された後、学者たちの、庶民のあの伸び伸びとした自由の雰囲気は現在どうなっているであろうか。

● **スイスチューリッヒ、アイガー** (2009.7.23-26)

チューリッヒでの日本ースイス脳神経外科合同会議。中間休日に訪れたアルプスで見たユングフラウとアイガー北壁の間に行く登山電車から見た景色は忘れられない。



アイガー北壁、登山電車, 2009

● **カーネギーホール** (2010.12.12-20)

小沢征爾のニューヨーク講演の侍医で同行。カーネギーホールでの練習、本番は格別だった。小沢さんが発熱して往診。小沢さん曰く「先生は聴診器持っていないの？」と。次の日に友人のコロンビア大学脳外科 D. Quest 教授に電話したら聴診器を持ってきて貸してくれた。その晩は Quest 教授に夕食をご馳走になった。“アブハチ取る”でした。公演打ち上げ会にはマエストロの子供さんが代理に出席。後年松本で元気なご本人と再会。昨年(2024)ご逝去された。



カーネギーホールにて(Boston)



打ち上げ会にて小澤さん子息・娘さん (Boston)



小澤さんと再会 (2015.9 松本)

●ヒマラヤ、ニューデリーの刺身 (2013.10.3-7)

インドに北の都市シャンディガール(Chandigarh)の PGI (大学院大学) の講演に招待されたときとき、途中ニューデリーで近郊の大学から信大脳神経外科に来ていた留学生が招待してくれた。ディナーで刺身がでてビックリ。秀子は食べなかった。

● イタリア・スペイン (2015.9.7-22)

イタリアのポンペイとバルセローナのサグラダファミリアとピカソ美術館のゲルニカが忘れられない。

サグラダファミリア →



● 紹興市 寒山寺 (2016.5.4)

上海の復旦大学の招待で訪れた紹興市の本場と、途中寄った有名な壮大な寒山寺の「月落ち烏啼いて霜天に満つ〜」の詩碑に感涙。次女のファミリーが同行。

● モロッコ(2005 年)

世界脳神経外科学会がモロッコのラバットで開催、一日ジープを借りきりイタリアの Bricoro 教授らと 4 人でサハラ砂漠へ行く。古い有名な映画「アラビアのローレンス」のロケ地もみた。ベルベル人の生活様式も垣間見た；男はあまり働かないようだ。

サハラ砂漠



●ムンバイ (2015.1.)、他の機会にもインド各地を学会時に訪れた。2015AOSBS (アジア・オセアニア頭蓋底外科学会) でドイツの Samii 教授と私が Honorary Guests。開会式の挨拶は会長の要望で私の代わりに秀子が挨拶を述べた。登壇して先ず Can you see me? といったら皆ドット湧いて会場の緊張がほぐれた。

● タージマハール (インド)

壮大な大理石建造物。以前裕子ともいったことが有り。当日は、タージマハール近くを開業する信大脳神経外科に留学した医師の診療所も訊ねた。



Can you see me? ムンバイ学会開会式にて (左)

Goel 教授、小林夫婦、Samii 教授 (右)

●そして結婚 50 周年（金婚式）の記念旅行。

1) 北欧旅行（2017.8.3-11）

阪急交通の北欧ツアーを利用した快適なガイド旅行であった。デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドとそれぞれ国の特徴を見ることができた。特に印象的だったのは矢張りフィヨルドのクルーズであった。河岸のホテルに大型クルーズ客船が横付けできる景観は圧巻であった。私には学問を離れた純粋な旅でリラックスして堪能できた。

左右：フィヨルド風景



2) 敦煌旅行(2017.11.15-25) :

上海在住の次女裕子家族と同行した。敦煌遺跡の中は撮影禁止であったが、古代の西域文化交流起点としての雰囲気は十分に感じられ、鳴砂山ではラクダに乗る経験もした。



敦煌莫高窟にて



鳴砂山にて

(平成25年) 1月23日 水曜日 信 濃 毎

文化

生活雑記

昨年の晩秋、北京で脳神経外科の国際学会が開かれた。学会長で知人の北京大学B教授の招きに、尖閣諸島問題で不安もあったが思い切つて参加した。学会のあとは教授の好意により、桂林に旅行をした。教授と部下の医師との計7人の少人数であったが、友好と交流を深める、大変楽しい機会となった。

桂林へは北京から飛行機で3時間。桂林は、山水画でなじみのある、丸刈りの頭のよいうな山々が街中まで迫つて見え、その美しさに圧倒された。桂林は人口500万人ほどの地方都市で、秦時代から要所

として栄えてきた。街の中を通る漓江の舟下りは世界的にも有名だ。その日は市内観光を楽しんだ。中国内からの多くの観光客で街はにぎわっていたが、尖閣諸島問題で揺

色は聞きしに勝る素晴らしい感動の連続、同行の仲間とも次第に打ち解けることができた。

私が最近書道で習った「有朋自遠方来不亦楽乎」（朋有

桂林での交歓

*** 小林 茂昭

れた時節を反映してか日本人観光客は少なかった。

翌日、いよいよ楽しみにしていた漓江下りだ。桂林郊外の船着き場から観光船に乗り30分ほど下流の陽朔まで約半日の行程を楽しんだ。景

り遠方より来る亦楽しからずや」を紙に書く、紙とペンでの会話が始まった。次いで私は季語がないが、「友情は変わる」となし漓江流る」と、即興の句を作り英訳して伝えたとこころ、若いY医師が「漓江寄情」と題した即席の漢詩を作つて披露してくれた。

いわく、「浮舟漓江遊 問君何所愁 共築百年好 此情無時休」（舟を浮かべ漓江に遊ぶ 君に問う何ぞ愁る所ありやと 共に築く百年の好この情休む時無からん）。

私は、「素晴らしい漢詩で感激した」と伝えると大変喜んでくれた。雰囲気はそうさせたのか、B教授はこの漢詩を作ったY医師を脳神経外科の研修に信州に留学させた、と言ひ出し、楽しい交歓となった。現在、Y医師を、私の勤める病院の外国人医師留学生として受け入れる手続きが進行している。

(74歳・松本市・医師)

The 11th Asia
Australasia Skull
Base Surgery,
Beijing, China,
2012.10 学会後北京大
学第一病院 Bao 教授
と桂林旅行。



桂林、漓江くんだり船中にて、河瀬教授、小林、Yi 先生、Bao 教授、2012 年

まとめ

私は人生の後半もそれなりに多彩で楽しく過ごしている。本冊子はその一端を書いたがとても書ききれない。でも自分史の一部の記録でもあるし、また覗き見ていただければ幸いである。

人は皆あまり語らずに人生を終える。そして静かにお別れのセレモニーを行う。その中で参列者は其の人の人生の余韻に浸る。そして以後も時々思い出して懐かしむ。

私の前任教授杉田虔一郎先生の最後の入院中は面会謝絶であった。一言言葉を交わしたくご入院中の病院にお伺いしたが会わせてもらえなかった。自己尊厳を貫かれた先生の美学であったのかも知れない。でも私には先生ご逝去後もズート現在も忘れえぬ思い出が続いて出てくる。昨年はミズホ KK 企画の「杉田虔一郎伝記」のビデオ制作のお手伝いをした。日本語版と英語版で杉田先生とその業績のエッセンスを伝えようとするものである。制作の過程で何か断ちがたい先生への縁を感じながら仕事をした。2 年近く要した企画だったので終了時には涙してしまった。

今回竹前紀樹先生と本郷一博先生から私の「長寿を祝う会」のお申し出を頂いた時、いろいろ考えるところがあったが、とにかくお申し出をありがたくお受けすることにした次第である。ありがとうございました。そして参加して会を盛り上げていただいた方々にも心からお礼を申し上げます。

今までの自分の人生を通して、いろいろなイベント・行事には妻秀子は控えめであり、協力的であった。唯、私はとにかく実行してしまうのである。実行する段階では妻は手綱を引き締めながらも、ときに感心するほど適切な示唆をしてくれ、また応援してくれた。ありがとう。いい妻・家族に恵まれ、いい友人・知人に恵まれた。大変ありがたいことで、無上のよろこびである。

ふと、一方自分では人のために何ができるであろうか思いをいたすことがある。偶々、この 2025 年 4 月に長年の友人脳外科医で現在ハーバード大学教授の Ossama Al-Mefty 先生から誘いがあつて、ハーバード大学で若い脳外科医達に講演するシンポジウムに講師の一人として参加することとなった。Yasargil 教授をよんでの会で、変わりつつある脳神経外科モダリティーの中で本来の脳外科手術の魅力の話をしてほしい、ということ。1948 年世界で初めてエーテル全身麻酔で手術が行われた MGH（マサチューセッツ総合病院）のエーテルドームをまた使うであろうかワクワクする。例えば 2009 年に WANS（世界脳神経外科アカデミー） 会議を開催した部屋で思い出に

残っている。この時は河瀬斌先生と参加した。



2009 WANS 会議, MGH エーテルドーム (Rhoton 教授 WANS 賞受賞講演)



エーテルドーム階段教室、河瀬教授と

140 名程になった信大脳外科教室同門会である。先日、長らく COVID-19 の影響で延期されていた同門会の懇親飲み会が何年かぶりに開かれ盛り上がった。ヒトは社会的な動物であると言われる。生まれてから出会うさまざまな人々やグループとの縁、様々な出来事や企画との縁、そして喜び、悲しみ、苦しみといったさまざまな感情との縁。これらの多彩な縁の中で、人は生き、そして一生を終わることになる。改めて米寿となった私の長寿を祝っていただきありがとうございました。

令和 7 年 3 月吉日

松本にて 小林茂昭



久方ぶりの同門会

2025 年 1 月 25 日 (松本)

寄稿文



小林茂昭先生の米寿を祝う・感謝の思いを込めて

信州大学名誉教授 本郷一博

先生がこの度米寿を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。同門の後輩のひとりとして大変うれしく思います。また、本誌に寄稿の機会をいただいたことを大変光栄に思い、深く感謝いたします。

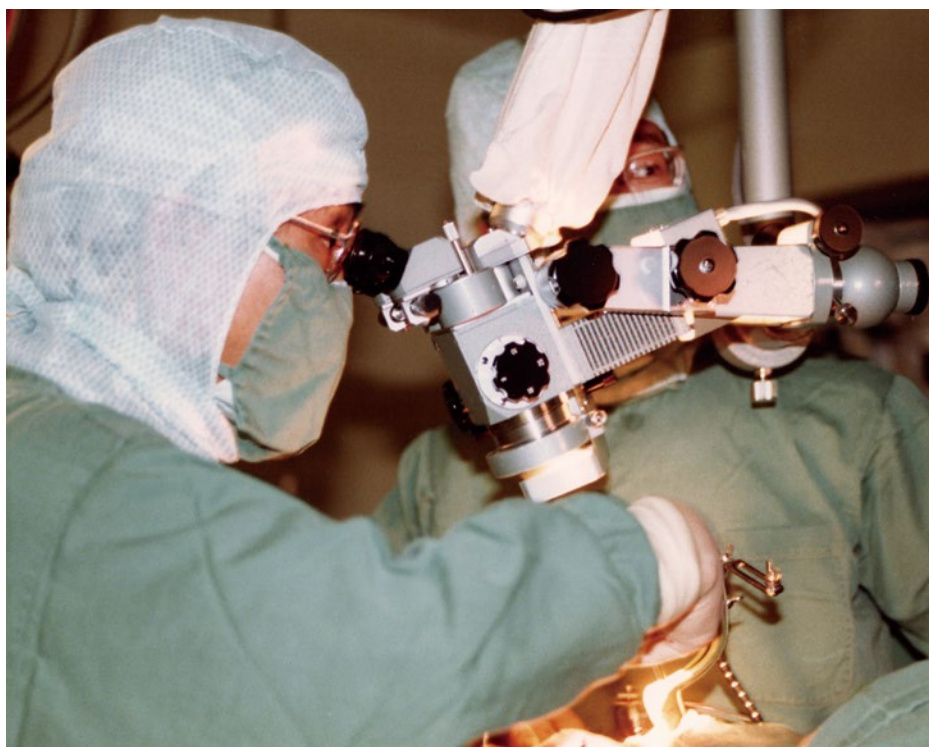
私が小林先生にはじめて「お会い」したのは、学生講義を受けた時のことと記憶しています。実に半世紀前のことになります。米国で脳神経外科専門医を取得されて信州大学に戻られ、脳外科班のリーダーとして脳神経外科学の講義を担当されていましたが、講義中の先生の姿が輝いて見えました。今でも脳裏に焼き付いています。これが脳神経外科に興味を持ったきっかけであり、そして脳外科医への道に進むことを決心したのは、医局説明会での小林先生の「脳神経外科は忙しく楽なところではない。かなりの覚悟がなければやっていけないところだ。やる気があるなら是非いっしょにやろう。」との言葉でした。杉田虔一郎教授を迎え、杉田教授・小林助教授体制ではじまった信州大学脳神経外科学教室の一員に加えていただいたのは、私にとって大きな幸福でした。

小林先生は教授時代に、国内はもとより国際的にも著明な活躍をされていましたが、それを再認識したのは、先生が退官され後任教授を務めることになって私も国際学会に参加するようになってからになります。私は「Shigeの後任」ということで随分温かく受け入れていただけたと思っています。後任教授を務めさせていただいた私も教授退任後すでに6年が経ちますが、小林先生が教授時代そしてその後現在までに成し遂げられた業績の量・質の偉大さには改めて敬服いたします。

そしてこの度米寿を迎えられました。先生が教授を定年退官され、「第二の人生」を歩まれた経緯が本誌に述べられていますが、その後20余年の生活の密度、アクティビティが教授現役時代と変わらず非常に高いことに驚いております。スキー、テニスは今でも続けられ、70歳で始められた書道では師範となられ、また俳句もされていらっしゃるとのこと。今でも勤務を続けられ後進の指導をされつつ、ご自身では脳神経外科医として国際学会に招聘され特別講演をされるなど、さらに充実度を増して来られているように思います。教授時代に比べ時間的にも余裕ができ、学会とは関係なく奥様との私的な海外旅行もされていることもとても素敵だと思います。

米寿を迎えられたとは言え、非常に活動的な先生は今後もまだまだお元気で過ごされ
ると確信しています。今は「人生 100 年時代」ですし、本誌の続編としてまた何年か
後には、「定年後第二の人生その二」あるいは「米寿後第三の人生」を執筆されること
を願っています。先生のこれからの人生がますます実り多きものとなりますよう、心
よりお祈り申し上げます。

令和 7 年 2 月吉日



茂昭 in 手術 (Dr.A.Ammar 撮影)

付録：2002 年以後の業績（著書・論文等）

著書：S. Kobayashi: What Is the Training in Neurosurgery All About? Lessons Learned from Japanese Culture. Learning and Career Development in Neurosurgery, Values-Based Medical Education (Editor: A. Ammar) pp: 17-25, Springer, 2022

主著論文：

1. Kobayashi S, Matsushima T, Sakai T, Matsushima K, Bertalanffy H, Rutka JT. Evolution of microneurosurgical anatomy with special reference to the history of anatomy, surgical anatomy, and microsurgery: historical overview. *Neurosurg Rev.* 2022 Feb;45(1):253-261.
2. Kobayashi S. On the editorship of an international scientific journal. *Neurol Med Chir (Tokyo)*. 2010;50(9):E11-2.
3. Kobayashi S, Hongo K, Koyama T, Kobayashi S. Re-occlusion of the superior sagittal sinus after surgical recanalization. *J Clin Neurosci.* 2004 Apr;11(3):322-4.
4. 小林茂昭: 脳神経外科診療における概念の開発. 信州医学雑誌 51(1): 5-8(2003.02)
5. 小林茂昭: 私流の手術記録の書き方. 脳神経外科速報 13(5): 488-491(2003.05)
6. 小林茂昭, 田中雄一郎, 柿沢幸成: 聴神経腫瘍手術の十訓. 脳神経外科ジャーナル 13(6): 419-426(2004.06)
7. 小林茂昭: 相澤病院研修医ならびに長野県内病院若手医師対象医学英語研修の試み. 相澤病院医学雑誌 10: 59-63(2012.03)

共著論文：

1. Satoh D, Sasaki T, Yako T, Kitazawa K, Kobayashi S. A Case of Intraosseous Petrous Bone Arteriovenous Fistula Complicated by Transient Worsening of Ipsilateral Hearing Following Transvenous Coil Embolization. *J Neuroendovasc Ther.* 2022;16(1):26-32.
2. Yako T, Kitazawa K, Kobayashi S, Yomo S, Sato H, Johnson LA, Vitek JL, Hashimoto T. Role of Microelectrode Recording in Deep Brain Stimulation of the Pedunculopontine Nucleus: A Physiological Study of Two Cases. *Neuromodulation.* 2022 Aug;25(6):925-934.
3. Satoh D, Sasaki T, Yako T, Kitazawa K, Kobayashi S. A Case of Dural Arteriovenous Fistula in the Falx with Prominent Falcine Venous Plexus. *J Neuroendovasc Ther.* 2021;15(7):444-448.
4. Satoh D, Nishikawa A, Kitazawa K, Kobayashi S. Usefulness of Distal Access Catheter in Endovascular Embolization for Spinal Dural Arteriovenous Fistulae in the Mid-Thoracic Segment. *J Neuroendovasc Ther.* 2021;15(4):260-264.
5. Matsushima T, Kobayashi S, Inoue T, Rhoton AS, Vlasak AL, Oliveira E, Albert L, Rhoton Jr., MD: His Philosophy and Education of Neurosurgeons. *Neurol Med Chir (Tokyo)*. 2018 Jul 15;58(7):279-289.
6. Kuroiwa M, Yako T, Goto T, Higuchi K, Kitazawa K, Horiuchi T, Kobayashi S. Inter-capsular resection of cervical vagus nerve schwannoma. *J Clin Neurosci.* 2018 Aug;54:161-164.

7. Matsushima T, Matsushima K, [Kobayashi S](#), Lister JR, Morcos JJ. The microneurosurgical anatomy legacy of Albert L. Rhoton Jr., MD: an analysis of transition and evolution over 50 years. *J Neurosurg*. 2018 Nov 1;129(5):1331-1341.
8. Matsushima T, Richard Lister J, Matsushima K, de Oliveira E, Timurkaynak E, Peace DA, [Kobayashi S](#). The history of Rhoton's Lab. *Neurosurg Rev*. 2019 Mar;42(1):73-83.
9. Duan H, Kitazawa K, Yako T, Ichinose S, [Kobayashi S](#), Sudo M. Gliosarcoma in the Cerebellopontine Angle with Rapid Tumor Growth and Intratumoral Hemorrhage. *World Neurosurg*. 2016 Aug;92:580.e17-580.e21.
10. Doden T, Sato H, Sasahara E, Murata T, Yako T, Kitazawa K, Higuchi K, [Kobayashi S](#), Hashimoto T. Clinico-Radiological Characteristics and Pathological Diagnosis of Cerebral Amyloid Angiopathy-Related Intracerebral Hemorrhage. *J Stroke Cerebrovasc Dis*. 2016 Jul;25(7):1736-1745.
11. Yi Z, Sasaki T, Satoh D, Murata T, Kitazawa K, [Kobayashi S](#). Carotid-Anterior Cerebral Artery Anastomosis Associated with Paraclinoid Aneurysm and Ophthalmic Artery Originating From Middle Meningeal Artery: Case Report and Consideration of Terminology. *World Neurosurg*. 2016 Apr;88:689.e1-689.e4.
12. [Kobayashi S](#). Kenichiro Sugita (1932-1994): a man of innovation. *World Neurosurg*. 2011 Mar-Apr;75(3-4):354-60.
13. Nagashima H, Okudera H, Hongo K, [Kobayashi S](#). Embolization of arteriovenous malformation using freeze-dried iohexol as contrast material. *J Clin Neurosci*. 1998 Jan;5(1):80-1.
14. Tanaka Y, Takemae T, [Kobayashi S](#), Sakai K, Miyahara T, Ishizaka S, Kodama K, Kobayashi T, Ichikawa Y, Tsutsumi K, Hongo K. [Clinical analysis of treatment and long-term outcome in 56 craniopharyngiomas]. *No Shinkei Geka*. 2007 Sep;35(9):887-93. Japanese.
15. Yomo S, Hongo K, Kuroyanagi T, [Kobayashi S](#). Parkinsonism and midbrain dysfunction after shunt placement for obstructive hydrocephalus. *J Clin Neurosci*. 2006 Apr;13(3):373-8.
16. Kitazawa K, Hongo K, Tanaka Y, Oikawa S, Kyoshima K, [Kobayashi S](#). Postoperative vasospasm of unruptured paraclinoid carotid aneurysms: analysis of 30 cases. *J Clin Neurosci*. 2005 Feb;12(2):150-5.
17. Sakai K, Tanaka Y, Hongo K, Tada T, Shigeta H, [Kobayashi S](#). [Treatment of craniopharyngiomas in children]. *No Shinkei Geka*. 2004 Apr;32(4):345-53. Japanese.
18. Sakai K, Shigeta H, Ogiso Y, Hongo K, [Kobayashi S](#), Hirose T. Pediatric embryonal tumor with epithelial immunophenotype showing absence of hSNF5/INI1 expression. *Childs Nerv Syst*. 2005 Feb;21(2):150-5.
19. Goto T, Hongo K, Kakizawa Y, Muraoka H, Miyairi Y, Tanaka Y, [Kobayashi S](#). Clinical application of robotic telemanipulation system in neurosurgery. Case report. *J Neurosurg*. 2003 Dec;99(6):1082-4.

20. Ito K, Tanaka Y, Kakizawa Y, Hongo K, [Kobayashi S](#). Aneurysm at the posterior inferior cerebellar artery of extradural origin for preoperative evaluation of safe clipping: case report and review of the literature. *Surg Neurol*. 2003 Oct;60(4):329-33; discussion 333.
21. Tanaka Y, Hongo K, Tada T, Kakizawa Y, [Kobayashi S](#). Protective dural flap for bone drilling at the paraclinoid region and porus acusticus--technical note. *Neurol Med Chir (Tokyo)*. 2003 Aug;43(8):416-8; discussion 418.
22. Tanaka Y, Hongo K, Tada T, [Kobayashi S](#). What is the best method for reporting tumor diameter in vestibular schwannoma? *Neurosurgery*. 2003 Sep;53(3):634-7; discussion 637-8.
23. Horiuchi T, Tanaka Y, Hongo K, Nitta J, Kusano Y, [Kobayashi S](#). Characteristics of distal posteroinferior cerebellar artery aneurysms. *Neurosurgery*. 2003 Sep;53(3):589-95; discussion 595-6.
24. Horiuchi T, Tanaka Y, Hongo K, [Kobayashi S](#). Aneurysmal subarachnoid hemorrhage in young adults: a comparison between patients in the third and fourth decades of life. *J Neurosurg*. 2003 Aug;99(2):276-9.
25. Tanaka Y, [Kobayashi S](#), Hongo K, Tada T, Sato A, Takasuna H. Clinical and neuroimaging characteristics of hydrocephalus associated with vestibular schwannoma. *J Neurosurg*. 2003 Jun;98(6):1188-93.
26. Attia W, Tada T, Hongo K, Nagashima H, Takemae T, Tanaka Y, [Kobayashi S](#). Microvascular pathological features of immediate perinidal parenchyma in cerebral arteriovenous malformations: giant bed capillaries. *J Neurosurg*. 2003 Apr;98(4):823-7.
27. Goto T, Hongo K, Iwashita T, Nagashima H, Oikawa S, Kyoshima K, [Kobayashi S](#). Paget disease causing intracerebral mucocoeles. Case illustration. *J Neurosurg*. 2003 Mar;98(3):643.
28. Kakizawa Y, Hongo K, Takasawa H, Miyairi Y, Sato A, Tanaka Y, [Kobayashi S](#). "Real" three-dimensional constructive interference in steady-state imaging to
29. discern microneurosurgical anatomy. Technical note. *J Neurosurg*. 2003 Mar;98(3):625-30.
30. Tanaka Y, Hongo K, Tada T, Sakai K, Kakizawa Y, [Kobayashi S](#). Growth pattern and rate in residual nonfunctioning pituitary adenomas: correlations among tumor volume doubling time, patient age, and MIB-1 index. *J Neurosurg*. 2003 Feb;98(2):359-65.
31. Hongo K, Horiuchi T, Nitta J, Tanaka Y, Tada T, [Kobayashi S](#). Double-insurance bypass for internal carotid artery aneurysm surgery. *Neurosurgery*. 2003 Mar;52(3):597-602; discussion 600-2.
32. Goto T, Hongo K, Koyama J, [Kobayashi S](#). Feasibility of using the potassium titanyl phosphate laser with micromanipulators in robotic neurosurgery: a preliminary study in the rat. *J Neurosurg*. 2003 Jan;98(1):131-5.
33. Hongo K, Tanaka Y, Horiuchi T, Tada T, [Kobayashi S](#). Internal carotid artery rotation technique to expose an aneurysm neck: technical note. *Neurosurgery*. 2003 Feb;52(2):455-7; discussion 457.

34. 原 淑恵, 近 貴志, 荒木 尚, 大宅宗一, 小林茂昭, 伊達 勲, McNally Philip: 同通秘伝の英語学会発表スライド作成レクチャー(第1回) 症例報告編 終わりよければすべてよし. 脳神経外科速報 33(4): 552-559(2023.07)
35. 丸山拓実, 伊東清志, 猪俣裕樹, 佐藤大輔, 八子武裕, 四方聖二, 北澤和夫, 小林茂昭: 動揺性に進行する脊髄症状を呈した頭蓋頸椎移行部硬膜動静脈瘻の1例. 相澤病院医学雑誌 20: 45-50(2022.07)
36. 伊東清志, 猪俣裕樹, 丸山拓実, 荻原直樹, 佐藤大輔, 八子武裕, 四方聖二, 北澤和夫, 小林茂昭: 【脊髄脊椎・末梢神経外科ことはじめ】頸椎変性疾患 頸椎前方除圧固定術 解剖の理解に基づいた安全な手術操作とコツは? Neurological Surgery 49(6): 1183-1196(2021.11)
37. 船戸光平, 佐藤大輔, 荻原直樹, 八子武裕, 北澤和夫, 多田 剛, 小林茂昭: 脳動脈解離症例に認めた非外傷性円蓋部くも膜下出血症例の検討. 相澤病院医学雑誌 19:65-70(2021.07)
38. 窪田雄樹, 北澤和夫, 船戸光平, 荻原直樹, 佐藤大輔, 四方聖二, 小林茂昭, 下条久志, 伊藤信夫, 千葉晃裕: 悪性神経膠腫との鑑別に苦慮したトキシプラズマ脳症の一例. 相澤病院医学雑誌 19: 59-64(2021.07)
39. 千葉晃裕, 八子武裕, 堤 圭治, 四方聖二, 北澤和夫, 小林茂昭: 出血発症した視床 capillary telangiectasia を内視鏡的に摘出しえた1例. 相澤病院医学雑誌 17: 43-47(2019.07)
40. 岡本 梓, 三澤賢治, 赤羽一真, 近藤鈴子, 小林茂昭: コンテスト形式によるシミュレーショントレーニングの試み. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌 5: 62-65(2017.08)
41. 片桐悠介, 八子武裕, 佐藤大輔, 北澤和夫, 小林茂昭, 樋口佳代子: 遅発性出血で発症した小脳 Rosette-forming glioneuronal tumor. 相澤病院医学雑誌 14: 61-65(2016.07)
42. 上條隆昭, 北澤和夫, 八子武裕, 佐藤大輔, 佐々木哲郎, 小林茂昭: 小脳出血にて発症した滑膜肉腫頭蓋内転移の1手術例. 相澤病院医学雑誌 14: 29-33(2016.07)
43. 岡本 梓, 三澤賢治, 近藤鈴子, 金子秀夫, 小林茂昭: コンテスト形式によるシミュレーショントレーニングの試み. 相澤病院医学雑誌 13: 33-36(2015.03)
44. 杉井成志, 八子武裕, 草野義和, 佐々木哲郎, 佐藤大輔, 北澤和夫, 小林茂昭: 左後下小脳動脈遠位部に生じた解離性動脈瘤の1例. 相澤病院医学雑誌 9:67-71(2011.03)
45. 北澤和夫, 平山周一, 内山俊哉, 長島 久, 小山淳一, 佐藤大輔, 小林茂昭, 本郷一博: 【脳血管内治療 VS 外科的治療・内科的治療】頭蓋内動脈狭窄 急性期 STA-MCA バイパス術の予後 28手術症例の検討. The Mt. Fuji Workshop on CVD 27: 52-56(2009.07)
46. 田中雄一郎, 徳重一雄, 本郷一博, 小林茂昭: 両側上下垂体動脈閉塞で視障害を生じたと考えられる2症例. 脳卒中の外科 37(2):133-136(2009.03)
47. 北澤和夫, 村岡 尚, 石坂繁寿, 長島 久, 小山 徹, 小林茂昭, 原 寛美, 本郷一博: 当院の SCU の現状と急性期リハビリテーション. 相澤病院医学雑誌 6:15-19(2008.03)
48. 長島 久, 本郷一博, 竹前紀樹, 大屋房一, 小山淳一, 後藤哲哉, 小林茂昭: 【High grade AVM の治療】High grade AVM に対する塞栓術と電気生理学的モニタリングを利用した集学的治療の有用性. 脳卒中の外科 36(1): 24-28(2008.01)

49. 千菊敦士, 長島 久, 佐藤大輔, 北澤和夫, 小林茂昭: 脳血管撮影後に破裂を来した脳動静脈奇形の 1 例. 相澤病院医学雑誌 5: 53-56(2007.06)
50. 村岡 尚, 北澤和夫, 長島 久, 小林茂昭, 石坂繁寿: 口論を機に短期間で再発をきたした外傷性頸動脈海面静脈洞瘻の 1 例. 日本神経救急学会雑誌 20(2): 92-94(2007.06)
51. 田中雄一郎, 竹前紀樹, 小林茂昭, 酒井圭一, 宮原孝寛, 石坂繁寿, 児玉邦彦, 小林辰也, 市川, 堤 圭治, 本郷一博: 頭蓋咽頭腫の治療と長期予後の検討 56 症例の分析結果. Neurological Surgery 35(9): 887-893(2007.09)
52. 北澤和夫, 村岡 尚, 石坂繁寿, 青山達郎, 長島 久, 小山 徹, 小林茂昭, 本郷一博: 2004 年当院入院脳梗塞 371 名での rt-PA 静注療法シミュレーション. 脳卒中 28(4): 619-622(2006.12)
53. 本郷一博, 後藤哲哉, 宮原孝寛, 柿澤幸成, 小山淳一, 田中雄一郎, 小林茂昭, 藤江正克: 日本発手術ロボット開発の現状と未来 脳神経外科における手術支援ロボット(現状と未来). 日本コンピュータ外科学会誌 6(3): 143-144(2004.12)
54. 酒井圭一, 田中雄一郎, 本郷一博, 多田 剛, 重田裕明, 小林茂昭: 小児頭蓋咽頭腫の治療経験. Neurological Surgery 32(4): 345-353(2004.04)
55. 多田 剛, 田中雄一郎, 本郷一博, 竹前紀樹, 一之瀬良樹, 青木俊樹, 外間政信, 鳥山俊英, 鶴木 隆, 小林茂昭, 宮武正樹, 村岡紳介, 上條幸弘, 黒柳隆之, 鳥羽泰之, 岩下具美, 渡辺敦史: 信州大学医学部附属病院で治療した悪性神経膠腫 125 症例の治療成績. 信州医学雑誌 52(2): 87-95(2004.04)
56. 堀内哲吉, 本郷一博, 新田純平, 佐藤 篤, 岩下具美, 小林茂昭: 超急性期中大脳動脈塞栓症に対する塞栓除去術. 脳卒中の外科 31(5): 338-343(2003.09)
57. 田中雄一郎, 本郷一博, 多田 剛, 酒井圭一, 柿澤幸成, 小林茂昭, 竹前紀樹: 経蝶形骨洞手術後に第 3 脳室内血腫を生じた下垂体腺腫 2 例. 日本内分泌学会雑誌 79(Suppl): 161-162(2003.08)
58. 田中雄一郎, 本郷一博, 小林茂昭: 解剖を中心とした脳神経手術手技 聴神経鞘腫の手術. Neurological Surgery 31(10): 1061-1070(2003.10)
59. 田中雄一郎, 柿澤幸成, 酒井圭一, 大屋房一, 多田 剛, 本郷一博, 小林茂昭: 小児期に施行した経蝶形骨洞手術法の長期予後. 小児の脳神経 28(4): 265-269(2003.08)
60. 田中雄一郎, 本郷一博, 多田 剛, 北沢和夫, 高沢尚能, 伊泊広二, 宮入洋祐, 小林茂昭: Paraclinoid 内頸動脈瘤を安全に露出する方法. 脳卒中の外科 31(2): 117-120(2003.03)
61. 本郷一博, 堀内哲吉, 新田純平, 小林茂昭: 【t-PA, 神経保護薬時代の超急性期脳梗塞治療】脳神経外科・血管外科的にみた脳梗塞超急性期治療 中大脳動脈塞栓症に対する塞栓除去術の有効性について. 成人病と生活習慣病 33(3): 361-364(2003.03)
62. 及川 奏, 京島和彦, 小林茂昭: 手術に必要な外科解剖 内頸動脈硬膜輪近傍 内頸動脈硬膜輪近傍の手術に必要な微小外科解剖. 脳神経外科速報 13(2): 148-149(2003.02)

(文献検索は信州大学脳神経外科教室秘書藤田泰子さんご協力による)



小林茂昭 2019 年



4 人の子供達、長男の結婚式で、 2007 年



My favored words for the time

穹人（茂昭）